International IC Association of Japan

(社)国際IC日本協会機関誌

# IIAJ

NEWS No.115

発行年月日　2008年3月31日
発　行　所　(社) 国際IC日本協会
〒156-0055
東京都世田谷区船橋 1-54-14
Tel:03-5429-1156 Fax:03-5429-1157
E-mail:LEB03055@nifty.com
発 行 人　橋本　徹
編 集 人　長野　清志
頒　　価　1部　200円

《インドCIB国際会議レポート》

## "グローバル化する世界におけるアジアの役割"

### ー新しいリーダーシップモデルに求められる信頼と高潔さー

2007年11月23日(金)から27日(火)まで、19カ国から160名の代表たちが集まり、アジアプラトー(インド・パンチガーニ)でインドCIB国際会議が開催されました。

初のインドICと日本ICとの共催で、"コー・イニシアティブス・フォー・ビジネス会議"の一環として開かれたこの会議は、2006年3月にインドからプラバット・クマール氏、スレッシュ・ヴァジラーニ氏、サロッシュ・ガンディー氏が日本を訪問し、国際IC日本協会の橋本会長(ドイツ証券会長)と会談したことに端を発しています。このアイディアが実現し、日本からは経済界・教育界、さらにメディアで活躍中の21名の代表団が参加し、テーマに沿った5日間に亘る会議の中で、体験に基づいた発表とその直後のディスカッションでの提言の数々、また寝食を共にし語り合う中から、インドと日本の強い過去の絆を認識し、これから未来へ向けて手をつないで行くための意義深い交流が行われました。

■主な内容

[日本・インド共催会議レポート特集]

◇CIB(コー・イニシアティブス・フォー・ビジネス)会議レポート・1-13
◇インドICセンター開設40周年記念会議レポート・13-15
◇ICニュース・15-16

## 11月23日（金）

### ◇ 開会式

ホスト役のサロッシュ・ガンディー氏（Mr.Sarosh Gandhi）は、代表団を歓迎して語りました。

「アジアは世界の3分の2の人口を擁する地域です。従って、もう後戻りできない状況の中で、より理に適ったグローバライゼーションにすることこそがアジア人すべてにとってのチャレンジとなります。ここで大切なのは、ただ経済的な利益を求めるのでなく、人間の価値そのものにもっと注意を向けることです。さらに信頼や高潔さ、そしてリーダーシップは、グローバリゼーションを前進させる上で、なくてはならないものです。さらにこの会議では、我々の前に横たわる問題に対して実際に行動を起こすことが大切なことです」。

また共同ホストである橋本会長は、「日本とインドのICがこのCIB会議を共催したことは時宜に適っています。日印両国はもとより、多くの困難を抱えた世界のために、産業界が果たしていくべき役割を共に見出す契機にこの会議がなり得れば幸いです。また、この会議のスポンサーとしてご協賛賜った各社に心よりお礼申し上げます」と述べ会場から大きな拍手を受けました。

インドの共同ホスト、サロッシュ・ガンディー氏と橋本会長

インドICの中心として長く活躍してきたマテゥア氏（Mr.R.D.Mathur）は、

「国境のない世界になり、日本とインドという2つの国が協力して共通の目的に進むことになりました。今、私たちの手の中にある最適な方法を用いて未来の世代のために公正で平等な世界を築いていこうと望んでいます」

と力強く情熱的に語りかけました。

### 《インドCIB国際会議》スケジュール

11月23日（金）
16:30～19:30　開会式
20:30～21:30　懇親会

11月24日（土）
08:45～09:30　全体会議「こころのチューニング」
09:30～10:30　全体会議
「グローバライゼーションにより貧富の差を縮めることが可能だろうか？」
11:00～12:30　上記テーマでのディスカッション
14:00～16:00　映画「不都合な真実」上映
16:30～18:00　上記映画鑑賞に基づくディスカッション
20:30～21:30　懇親会

11月25日（日）
08:45～09:30　全体会議「こころのチューニング」
09:30～10:30　全体会議
「グローバライゼーション化する世界で信頼の構築を図るために」
11:00～12:30　上記テーマでのディスカッション
14:30～16:00　全体会議「社会に正直さと信頼性を高めるための、又、より良い統治のためのメディアの役割」
16:30～18:00　上記テーマでのディスカッション
20:30～21:30　インドICメンバーとの懇親会

11月26日（月）
08:45～09:30　全体会議「こころのチューニング」
09:30～10:30　全体会議
「企業の社会的責任に対するグローバライゼーションの影響」
11:00～12:30　上記テーマでのディスカッション
14:30～16:00　全体会議
「新しいリーダーシップのモデルを求めて」
16:30～19:00　マハブェシュワール町等訪問
20:30～21:30　文化の夕べ

11月27日（火）
08:45～09:30　全体会議「こころのチューニング」
09:30～10:30　全体会議「今後のアクションプラン」
11:00～12:30　閉会式

深い緑に囲まれたアジア・プラトーセンター

400席の劇場も備えたメイン・ビルディング

会議の様子

## 11月24日（土）

### ◇テーマ「持てる国と持たざる国との格差は、グローバライゼーションによって解決できるだろうか」

３人のパネラーが登壇し、それぞれの意見を展開しました。

最初の発表者で元インド最高裁判事のヴァルマ氏(J. S. Verma）は、今すぐ求めるべきこととして、次のように述べました。

「私たちは、グローバライゼーションを避けることはできません。問題は、『持てる国と持たざる国との格差はグローバライゼーションによって解決できるかどうか』ではなく、『どのようにすれば、その格差が取り除けるのか』ということなのです。

私たちは、自分を他人の側に置いてみて、繁栄や成功を分け合わなければなりません。人間としての誇りを保つためには、いつも自らに問いかける必要があります。『もし自分がこうされたら、自分の誇りが傷かないか』と考えることです。経済的な成長も、適切な政策抜きでは不十分なものとなります。富は、公平に分配されなければなりません」。

続いて、マイソールでスワミ・ヴィヴェカナンダ青年運動を始めたバラスブラマニアム氏（Dr. Balasubramaniam）は次のように述べました。

「人間の繁栄は、単に経済的な条件だけで計ることはできません。物質的な豊かさと幸福感のレベルは単純に結びついてはいないからです。小さな部族たちの住む地域では、多くの人々は物質的には貧しくとも本当に幸せに暮らしています。自給している“持てる者”である部族の人たちを国際的な機関の一方的な開発の価値観でもって“持たざる者”とみなしてしまうのは危険です。

農業では、伝統的な農業を大切にして、持続的たり得ないマーケットに左右されるような農法は、避けるべきです」。

クォリファイド・ラーニング・システムの創設者シブ・ケーラ氏（Mr.Shiv Khera）は、次のように言葉を引き継ぎました。

「得た富を効果的に用いる能力を身につけている必要があります。結局は人々が平等にチャンスを与えられることが大切です。そのチャンスを生かせるかは自分次第です。トランスパレンシー・インターナショナルの調査でも、会社の繁栄と誠実さの間にはっきりとした相関関係が認められています」。

## ◇ 映画「不都合な真実」を上映

午後のセッションでは、前アメリカ副大統領アル・ゴア氏の製作した映画で、地球温暖化についての詳細なデータと提言が盛り込まれた“The Inconvenient Truth”（邦題「不都合な真実」）が上映され、どの国にとっても深刻な危機となっている、このテーマに対し熱のこもった討論が繰り広げられました。

Canon India 社長の小西謙作氏が、環境への取り組みと関連して次のような具体的な提言と目標を述べました。

「会社というのは、単に資本を生み出す道具とみなすべきではありません。将来の環境を破壊しないよう注意を払うべきなのです。経営の考え方を通してそれは可能となりますが、今日それが会社にとってもチャレンジとなりつつあります。例えばキヤノンでは、従来の生産方法を革新することで環境を良くすることに貢献しています。2010 年までに CO2 を２分の１まで減らすことを目標としています」。

次に、同じく環境への取り組みを実践し、古タイヤ等のリサイクルによるゴム製品の開発で成功を収めているラジェンドラ・ガンディー氏 (Mr. Rajendra Gandhi,MD-Gujarat Reclaim and Rubber Products Ltd.) は、「もしあなたが何か選択する際、他人との比較ではなく、自分自身が正しいと思うことを選ぶべきです。地球温暖化は、我々の消費の仕方とつながっています。個人個人が欲求と満足の間に良心にのっとって一線を画する決意が必要なのです」と述べました。

そしてアナント・ナドカルニ氏 (Mr.Anant Nadkarni、コミュニティ・イニシアティブのための TATA 協議会副会長）は、TATA グループ内でも様々な問題に挑戦するリーダーシップの形について語り、特に強い意志とチームワーク、さらに奉仕の精神が必要だと説きました。

## 11 月 25 日（日）

## ◇テーマ「グローバライゼーションの中での信頼の醸成」

会議の中心は、どのように国際的な信頼を醸成していくのかという点に向けられました。

イギリスの作家でジャーナリストのマイケル・スミス氏 (Michael Smith) は、出版された自らの著書“Trust and Integrity in the Global Economy”（『グローバル経済における信頼と高潔さ』）の中で、地方や国レベル、また国際的レベルの 15 の実話を載せています。「大きな目的のために自分の人生を用いようとすれば、世界を変える役割の一部を担えると信じているので、この本が皆さんのお役に立てば有難いです」と語りました。

日本から参加した舩橋晴雄氏（大蔵省を退官した後、シンクタンク、シリウス・インスティチュートを設立し代表を務める）は、「日本は企業の社会的責任 (CSR) という問題に真剣に取り組んでいます。どのようにして日本人の美学に気づくかということについて、４つの鍵となるものは、正直・相互の尊敬・節度・雅です。日本人の観点から言うと、人間は生来善なるものであるのだから、それに気づき、それに従って生きるべきなのです。私たちは互いに関わりを持つ中で、他人の美学に無関心には生きていくことはできないのです。人は金の奴隷ではない。お金や物は、人々のために使われるべきであり、それに使われてはならないのです」と述べました。

ディスカッションでは、歴史の中で多くの間違いがあったことを認め、謝罪し、許しを請うということが信頼を築くという実例として、日本と中国の関係、家族の関係、また白人と先住民の関係、あるいはまた、イギリスと中国の関係など、様々な国の人が次々と体験を語ってくれました。

## ◇テーマ「社会に正直さと信頼性を高めるためのメディアの役割」

イギリスのメディアから、ヒュー・ノーウェル氏(Hugh Nowell)、ニューデリーから、サビーナ・インダージット女史(Subina Inderjit、タイム・オブ・インディア紙)、ポーランドからマルゴルザータ・ボニコウスカ氏(Malgorzata Bonikowska)とアニエスツカ・オストロウスカ氏(Agnieszka Ostrowska)がパネリストとなり活発な討論が行われました。

メディアの使命は社会に、公共の意識を高め、よりよい統治を支援することを目的としていること、しかし実際は、商業主義に陥っていること、ジャーナリストは、今自分たちの向かっている状況について反省する必要があり、また読者がジャーナリストを助ける必要も大きいことなどを指摘しました。さらにインターネットを活かした市民ジャーナリズムの重要性について語りました。

各国からの会議参加者

## 11月26日(月)

## ◇テーマ「企業の社会的責任(CSR)におけるグローバライゼーションの影響」

J.J.イラーニ氏(Dr.J.J.Irani,TATA Sons Ltd. Mumbai取締役元タタ製鉄社長)

「企業の社会的責任とは、費用でなく投資です。ですからこれは必ず将来戻ってくるものです。インドにおいては、企業はより良い教育、より良い医療などに係わっていく必要があります。従業員も顧客も供給者も地域社会も道義的な組織を好むため、組織の将来はその実践にかかってきます。もっとも重要なリーダーの資質は信用であり、言ったことを実行する勇気を持つことです」。

橋本 徹氏(ドイツ証券会長)

「グローバライゼーションと共に投資家も顧客も従業員も供給者も地域社会も世界化し、そのことにより企業の社会的責任も世界化しました。企業が世界化すれば、多くの違った文化や慣行に注意を払い、顧客や地域社会のニーズに応え、それぞれの国の法律等に従う必要があります。ここで大切なことは、《世界的な視点に立って考え、地域で活動する—"Think Global, Act Local"》ということです。

そこでコー円卓会議でのビジネスの基本理念が大切なのです。投資家を超えてのコミュニティーへの責任、革新や正義、世界的なコミュニティーへの貢献、法律の条文を越えた透明性、規則や規制の尊重、多国間貿易へのサポート、環境を守り、向上させるための努力、マネーロンダリングに見られるような道義に反することをしない等、このような基本的なことがもっと多くの国々に広がることを望んでいます」。

サビール・ラハ氏

(Mr.Sabir Raha、Hinduja グループ副会長)

「過去においては、企業の社会的責任(CSR)というと慈善事業のように考えられ、時には見せかけに過ぎませんでした。しかし組織としては、利益を超えてCSRを継続して考えるということは稀です。周りの地域社会を巻き込むことにより起こる"包括的な成長"によりCSRが効果的に実行できるのです」。

ディスカッションでは、自らの変革がまず基本であり、そうすることにより触媒として周りの人々を変えていけるなどの活発な意見が交わされました。

## ◇テーマ「新しいリーダーシップモデルの探求」

ジム・レスター氏
(Sir Jim Lester、元イギリス国会議員)
「政治とは変革を受け入れさせるという芸術です。国際連合を改革すべきです。たとえるなら今の状態は、2007年の現在に1945年製の車で走っているようなものです。特に2015年までに目指している開発計画の達成の困難さや核の拡散などの懸案があります。適切な資金の手当が重要であり、同時に世界の心ある人材を集めるべきです。またその力、頭脳、機関についてバランスの取れた組織にしなければなりません」。

お皿洗いも皆で楽しく

プラブハット・クマール氏
(Mr.Prabhat Kumar、元インド内閣官房長官)
「いま、経済界でも、政界でも、一般社会でも、リーダーシップの危機に直面しています。以前はしっかりしたヴィジョンを示せるリーダーがいました。しかし今はヴィジョンが希薄で、お金が目標となり、富が崇拝の対象となってしまいました。道義性を備えたリーダーが不足しているため、インドの村々の統治が効果的にされていません。いまや何千という効果的なリーダーを生み出す、"生産ライン"が必要です」。

ディスカッションでは、若いリーダーたちを生むトレーニングプログラムの必要性が説かれました。またリーダーシップは、あらゆる現場、家庭や学校にも必要である等の意見が発表されました。

## 最終日　11月27日（火）

## ◇テーマ「これからの行動計画、目標について」

この会議に参加して勇気づけられたこと、新しい行動計画や目標、各々の個人的な感想や意見が発表されました。

- ·インドと日本が連携し、アジア全体に心を配ろう。
- ·次の会議にはぜひ中国の代表団を迎えよう。
- ·我々の最高の理念と経験を使って国際連合の再構築に力を合わせよう。
- ·新しいリーダーシップへ向けて情熱のある人たちのネットワークを作ろう。
- ·今21世紀を和解の世紀としよう。
- ·5つのC、すなわち、勇気、誓約実行、コミュニケーション、ケア、共感(Courage, Commitment, Communication,Care, Compassion)こそ最も大切な要素であると自覚しよう。

等々、様々な未来に向けての目標が挙げられ、一人ひとりがその実現のために努力を重ねることを誓いました。
(なお、この会議のスポンサーとして、キヤノン、全日空、ドイツ証券、ニフコ、みずほフィナンシャルグループ、横河電機の各社からご支援を賜りました。ここに改めて心より御礼申し上げます。)

# インド・パンチガーニで学んだこと

舩橋晴雄（シリウス・インスティチュート代表取締役）

インド・マハラシュトラ州パンチガーニにあるICセンターは、アジア・プラトーという名の通り、広大な台地の縁のような所にありました。岡の斜面に広がる敷地内に、本部やロッジが点在しています。亭々たる巨木が聳え、高原の初秋のような静かで清々しい空気が漂っています。

今回ここで開かれた日本・インド国際IC共催の会議、テーマは「グローバル化する世界におけるアジアの役割—新しいリーダーシップに求められる信頼と高潔さ」というものでした。

今回の会議は、アジアに住む我々が持つ、共通の基盤をお互いに確認し合う契機となったように思います。我々はアジアの台地（Asia Plateau）にしっかりと足を据え手を繋ぎ合える友人であるということです。共通の基盤とは何かと言えば、それは共生と信頼を大切にするという人としての生き方ではないかと思います。

インド側の発言者も日本側の発言者も、例えば次のような考え方を共有していました。

企業は、何らかの価値を生み出すだけでなく、他の人のために何か有益なことをしなくてはならない。地域や他の人々との共生なくして永続することはできない。そのために企業は様々な活動を実践していくことが必須である。これらは単なる慈善活動のような一時的なものではなく、事業を続けていく恒常的な条件である。企業自身がそのような考え方に立って、倫理的な企業となった時初めて社会はその企業を評価し、受容する。そして、企業の中に働く従業員もそのことを望んでいる。何故ならば、そのような企業でこそ誇りを持って仕事ができるからである。

このところの所謂株主資本主義に洗脳されてしまった人はいざ知らず、このような考え方は我々にとって違和感のないものですし、そもそも日本人が以前からずっと持ってきたものでした。

もう一つは、どのようにして信頼を作り上げるかということです。それにはまず価値観が大切だということが強調されました。

共生という価値観、貢献という価値観、公共に奉仕するという価値観、このような価値観を持っていれば、自ずとそれが行動に出てくるのです。企業で言えば、トップ・リーダーが上のような価値観を周囲に説き、率先して実践していけば、自然と相互の信頼関係が醸成されてくるのです。

企業は利益の追求を目的とする団体であって、信頼の組成を目的とする団体ではないと、法律上は言えるのでしょう。しかし、信頼関係のないところに、利益は生れる筈もありません。いつ欺かれるかわからなくては、誰もその商品やサービスを買おうとしませんし、誰もお金を貸してくれませんし、そもそも社員だって集まりません。これも当然のことでしょう。

そして信頼を得る最も大きな要素は、他者への愛ではないかということも強調されました。例えばマハトマ・ガンジーの思想と行動、あるいはジャムシェドシー・タタ（タタ・グループの創業者）の思想と行動の源に、人々への愛のあることが強調されました。大きな影響力を持った人々が等しく発揮してきたものが、この愛の力でしょう。こうしてみると、このインドの広大な台地が、いかに包容力に富む思想を生んできたかが分かります。

会議には少なからず欧米からの参加者もいましたが、その一人が呟いていたことが耳に残りました。「地域環境や人類の未来のことを考えると、私は欧米のものの考え方でこれからも人間が生きていけるかどうかには懐疑的なんだ。インドに来てインドの人々と話をしていると、心が癒される思いがする。何時も何ものかに急き立てられ監視されているような息苦しさを感じる社会が、本当に人間にとって生きるべき社会なのだろうか」。

このような考え方に、グローバリズムの進展した今こそ、我々アジアの人々が培ってきた思想や価値観が、あらためて再評価されなければならないと感じたものです。

# 共生と企業の貢献

小西　謙作（キヤノン・インディア社長）

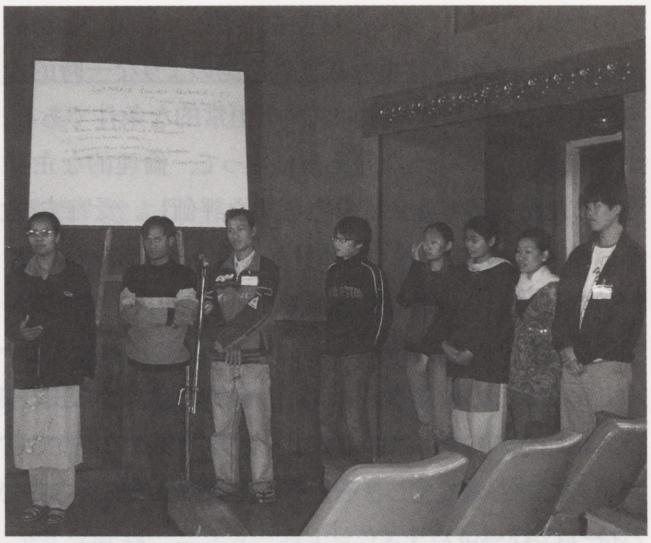
1990年代半ば、私がワシントンに赴任していた頃、コー円卓会議がワシントンで開催され、当時の弊社賀来会長のアテンドをしたことがあります。その意味で、個人的にはかなり感慨深いものがありました。

会議を通じいろいろ考えることがありましたが、まず第一に、企業を限定的な利害関係者の利益追求のための手段と考えるのか、永続的な繁栄を目指す社会の必要不可欠な構成要員ととらえるのか、ということです。企業が永続的に繁栄を続けるためにはその企業が活動している地域、国、世界の繁栄が必要条件です。そう考えれば、環境に対する取組み、社会全体に対する企業の貢献は、企業活動をしていく上で絶対必要なことであり、余裕があれば行うとか、法令で決められたから行う、ということではありません。弊社の企業理念である、共生（working and living together for common goods）というのも同じことを言っているのだと考えています。インドにおいても、各種の取り組みをしていますが、今年からはデリー周辺の子供たちに対する眼の健康診断、治療、リハビリ、衛生に対する普及活動に協力することになりました。資金的なサポートだけでなく、衛生に対する普及活動等で従業員の積極的な活動に対する参加を期待しています。

しかしながら、昨今のマネーゲーム全盛の風潮の中でこのような理念を広げていくことは大変な困難を伴います。そのような中で、世界各国から、官界、政界、実業界、マスコミ、学生、そして主婦といった立場の違い、年齢も異なる人々が一堂に会し議論をともにすることは非常に意義深いことだと思います。残念ながら今回は日本からの学生ボランティアの方はいなかったようですが、韓国やインド、オーストラリア等から若い方々が非常に熱心に参加されており感銘を受けました。この活動の長い伝統と今後の継続を確信した次第です。

アジアプラトーの建物を見た時に、その内装が非常にきれいだったので、最近建てられたのかと建築年を聞いたところ、もう40年近くになると聞いて大変に驚きました。この活動に参加している方々が、まさに自分自身のものとして、日々の清掃や維持をしていかない限り、このような状態を保つことは難しいだろうと感心した次第です。

手入れの行き届いたセンターの内部



センターで学び、変わった点を話してくれたインターンの青年たち

# 2007年国際IC協会の会議に参加して

－グローバル企業としての倫理・コンプライアンス、地球環境、社会貢献－

沖野　清昭　（横河電機株式会社　執行役員企業倫理本部長）

会議はグローバル化の影響をテーマに基調講演やパネラーの発表の後、出席者の質疑応答、意見交換がされる形で進められた。

(1) グローバル化により貧富の格差を縮めることが可能か？

以前社会主義の国ですら貧富の差は存在していたし、政策的に無理に格差をなくすと、経済の活性化が図れなくなるため必ずしも良いことではない。しかし現在のように先進国と発展途上国の構造的な大きな格差や国内の格差の拡大は資本主義社会を崩壊させかねない。貧困層は子供の教育も行き届いていないので次世代にも格差が是正できない可能性がある。そこで先進国は食料や医療関係の支援だけではなく、むしろ子供の教育、職業訓練の充実が重要と考える。今後は格差を是正し真の平等、信頼関係が築かれないと先進諸国の一部が富を独占することは許されなくなる。

（2）グローバル化は信頼性という土壌を損なわないか？

グローバル化によって少なくとも信頼の土壌が損なわれてはいけない。しかしインドと米国の関係を例にとると、ＩＴによりグローバル化は進んだが、結果として米国内における知識産業、ソフト・サービス産業の空洞化と両国の貧富の格差の拡大を招いたといわれている。少なくとも米国内では一部を除き信頼という土壌が損なわれたといえる。正当な競争の結果であればやむを得ないが、インドの低賃金が原因とすれば両国の信頼性を脅かすことになる。

（3）企業の社会的責任（CSR）に対するグローバル化の影響は？

このセッションでは自分もパネリストとして登壇し、YOKOGAWA グループがグローバル企業として取り組んできた倫理・コンプライアンス、地球環境、社会貢献について発表した。CSR の考え方、具体的な取り組みの例を挙げて説明したので、地球環境についても、社員一人ひとりが温暖化対策を確実に実行していくことの大切さは理解されたと思う。

会場でアル・ゴア氏の「不都合な真実（The inconvenient truth）」を映画で見て改めて地球温暖化の深刻さを感じ、今まで以上に利便性を我慢する覚悟の必要性を痛感した。

最後に、会議で議論された問題を解決するためにはIC 協会が中心となって各々の国の企業、学校、NPO・NGO 団体などが自ら具体的にアクションプランを実践し、その結果を次回の会議でレビューし、その反省に立って次のアクションプランを立てる PDCA のサイクルを回すことで活動の効果が上がると考える。

アジアプラトー滞在中は朝 6：30 の Morning Tea から始まり、朝食後から 21：30 まで会議やイベントが組まれていた。部屋の掃除や食事の準備、後片付けは基本的に当番制で自分たちが行うことになっていたが食器洗いも皆でやれば楽しいものだ。食事は野菜が中心でカレー味が多く、美味しかったが、後半は肉や魚、ビールが恋しくなった。

インドの市内は人が溢れ、市場は活気があり、車両も多く、高速道路は整備されつつある姿を見ると、今後もインド経済が高成長を続けるバイタリティを感じた。

文化の夕べで日本の踊りを披露する参加者たち

# 活力にあふれるインドの人々

高橋　久子（主婦）

ムンバイのエアポートを一歩出るや否や、深夜にもかかわらず200人近い人々が暗い中わいわいと迎えるべき人を探している。お祭りのような騒ぎに驚かされた。東京から14時間近くかけて飛行機を乗り継いで来た私たちは、途方もないインドの人々のエネルギーを先ず知ることとなった。

空港近くに泊まったホテルにはわずか数時間の滞在であったが、窓から朝覗いてみると、周りはスラム街、泥んこの水溜まり、あちこちにゴミが散乱していた。ホテルの中は、清潔で広く、居心地良くできているのだった。

目的地パンチガーニへ向かう道すがら、道路でも沢山の人々が至る所でたむろしたり、動き回っている。街の中へ入ると、道に戦場のごとく、オート三輪を改造したタクシー、バイクの2人乗り、サリーを後ろへなびかせて逞しいこと、バスに高級乗用車が入り乱れて道の取り合い、その列に人々が平気で入ってくる。…　6時間の道のりではインドの人々のバイタリティーに驚かされ続ける。パンチガーニに到着すると、美しいサリーをまとったレディー達が、私たち一行の一人ひとりに花輪を架け、額に赤い印をつけてくれる。これはヒンドゥー教のしきたりだそうだ。ケーキやお茶で大歓迎を受けた。

パンチガーニにあるICセンターの静かで美しい佇まいは、この世の楽園とも言えるようだ。朝起きてみると、戸外は真っ青な空で、200名近く宿泊できるという宿舎の白い建物から一歩出ると道からブーゲンビリアや名も知れぬ花々が咲き乱れ、遠くに運動場や、整えられた庭園などが広がっている。40年の長きにわたって人々の努力と心で守られてきた場所なのだと実感することができた。

開会式に始まり、会議は5日間みっちりとプログラムが組まれていた。毎日のプログラムが始まる前には必ず「心のチューニング」という時間があり、

日本からの参加者

コーディネーターの人が毎日変わり、その人にとっての「心の声を聴く」ことの意味や体験が話され、深い心の底から、会場にいる100人余りの人々との一体感が感じられる。

毎日話される心底からの体験談や自分の心との向き合い方を学ぶことは、このパンチガーニ・ICセンターの目指す真髄に触れるような気がした。また、アジアの国々から来ている若いインターン達が、プログラムの合間合間に歌を歌ったり、体験を発表する姿に心を打たれ、またその青年達と共に歩み、パンチガーニを支えている2組のご夫婦たちの姿に深く感銘を受けた。その場に参加する人、一人ひとりのリーダーシップの素晴らしさ、体験に基づく知恵と心が、どの発言者・参加者にもあふれている。ここの会議全体に満ち渡る信頼と高潔さは、他のどこにも得られない時間であり、空間であると思われた。

コーラスを始め、大活躍してくれた青年たち

# 賄賂のない健全なビジネス
# No bribes for healthy business

## スレッシュ・ヴァジラーニ氏の挑戦

(Suresh Vazirani、トランスエージア・バイオメディカルズ社、会長兼社長／インドIC協会理事)

汚職はビジネスにとっても健康にとっても良くないのだとスレッシュ・ヴァジラーニ氏は言います。彼の妻マーラは、「夫が人の命を救うための医療機器を開発する仕事についたことは、ヒンズー教の行いとしてすべきことだったのだと思う」と語っています。本当は、彼は医者になりたかったのですが、両親は、7人の子供たちの中で1人だけ奨学金を受けられることとなった彼に電気工学の勉強をさせるために、インド中心部のナグプール大学（Nagpur Univ.）に送りました。このことが幸いして彼はエンジニアとしての基礎を学ぶことができました。彼の会社 Transasia Biomedicals（トランスエージア・バイオメディカルズ）は、ムンバイに本社を持ち、高度な血液分析機器製作企業として、インドの市場の指導的存在です。

もしあなたが手術をしなければならないとか、マラリア、結核、エイズなどの命に係わる病にある時、医者は、あなたの病気を瞬時に見分けなくてはなりません。血液を採り、血液分析器にかけます。ヴァジラーニ氏の作った分析機器は、600種類のテストを1時間以内に分析することが可能です。さらに200種類以上の血液の病気を見分け、命を救うことができるのです。

取締役社長のヴァジラーニ氏は1985年、小さな貿易会社（主に輸入貿易会社）として、Transasiaの基礎を作りました。今日に至っては、Transasiaは、約50カ国に輸出を行う国際的な会社として発展しました。

“人々を援助することが、市場の流れをリードすることになった”－これは2004年ジャパン・タイムズがヴァジラーニ氏の会社を記事として取上げた時の新聞の見出しです。一つの医療機器会社が市場でトップの座を得ることになった始まりの陰には、事業をする上で、自分たちの利益よりもむしろ、他人を援助することを強く推し進めたことがあったと、この記事の中で述べられています。

2005年に会社は、インド政府国家研究・開発賞と、この年の最も将来性のある小・中製造メーカーとして5000社の中からインド新興企業賞を受賞しました。受賞に際し、ヴァジラーニ氏は、「企業と産業は、人々を癒すためのものを作ること、そしてすべての人々のためにより良い世界を創るための役割を果たさなければならない」と述べました。

2000年初頭、Transasiaは、当時のアタル・ビハリ・ヴァジパイー（Atal Bihari Vajpayee）首相から、その卓越した仕事に対しインド第一位国家輸出賞を授与されました。また首相は、先端バイオテクノロジー企業に対しての国家品質賞をヴァジラーニ氏の妻マーラさんに贈り称えました。

### 汚職に立ち向う

数々の賞を得たことよりも、もっと強く印象づけられるのは、ヴァジラーニ氏の汚職に対する根気強く弛まぬ姿勢です。どんな問題よりも汚職を避けるための時間を多く割くこととなったとヴァジラーニ氏は言います。

彼の会社では、2人の弁護士を雇い、フルタイムで汚職の問題に対処しています。例えば、彼は昼食をとる場所に噴水を据付けたいと思いましたが、2人の政府の役人が許可する代わりに100ドルの賄賂を要求したのです。しかし、そのような許可証は、この20年間で1度も発行されていなかったのです。これについて、法廷で4年間も争い、4000ドルの費用がかかりました。それでもヴァジラーニ氏は、彼の会社の誠実さを示すためにも、このような問題を解決する価値があると考えています。

1947年パキスタン独立の時、ヴァジラーニ氏の両親は、着の身着のままでパキスタンから難民として逃れてきました。当時は一青年だったヴァジラーニ氏は、家族から権利を剥奪し汚職をした政治家らを非難しました。しかし、その後、彼はMRA（現IC）に出会い、

（バジラーニ氏）マーラ夫人と共に　（左側の二人）

ここで彼は、言ったことを実行することや非難するより責任をとることを学ぶ機会を得ました。

大学を卒業する際、彼はMRAのボランティアとして働こうと決心しました。そして、インドのアジア・プラトー（プネ近郊のMRA会議センター）で、ビジネスリーダーシップ・トレーニングプログラムの運営をサポートしました。そこで彼はビジネスマンに汚職をしないよう説きました。すると彼らからこういう答えが返ってきました。「それには全く異議はありません、でもあなたは一度も仕事をしたことがないから、そんなことが言えるのでしょう、ビジネスがどんなものか分かってないのですから」。

その言葉は、ヴァジラーニ氏を苦しめましたが、それにも一理あると思いました。MRAのボランティアを9年務めた後、収入を得る必要が生じた彼は、ビジネスの世界に身を投じようと決めたのでした。

### 4ポンドからの出発

1979年、彼と友人サティッシュ・スタリア（Satish Sutaria）は、“アジア・プラトー”を常に想い起こすように、“トランスエージア（Transasia）”という名の会社を起しました。その時彼は29歳、持っていたお金はたった250ルピー（約4ポンド、現在の日本円で約750円）でした。

彼らの構想は、輸入と市場調査の会社を作ることでした。資金もなく、工場もなく、オフィスを借りるお金もありませんでした。しかし、MRAの経験があったことで、重大な社会問題に関連した産業分野で、ヘルスケアか社会的サービスをしたいと考えていました。ビジネスパートナーの母親は宝石を売って、寄付をしてくれましたし、家のダイニングルームをオフィスとして貸してくれた人、またお金を融資してくれた人もいました。世界中の会社100社にマーケティング・サービスを申し出る手紙を書きましたが、何の返事もありませんでした。ビジネスパートナーのスタリアは、ローン返済が簡単ではないと感じていました。

そこでヴァジラーニ氏は、彼の人生で最も大きな賭けに乗り出したのです。

それは、6ヶ月間世界一周のチケットを買うことでした。世界を見て廻り、インドが最も必要としているものは何なのかを探すためでした。この提案について行けないスタリアはパートナーシップを解消することにしました。

イタリアでも医療器機の会社を訪ね、また東京では、下山氏という医療機器を扱う、若く活動的な輸出担当マネージャーと会いましたが、彼らは直ちにヴァジラーニ氏を信頼してくれ、日本そしてイタリアの医療診断器機の代理店契約を結べるようになったのです。

しかし1991年転機が訪れました。ローマから届くはずの機械が届かないというトラブルが発生したことで、自分たちの力で製品を作ろうと思い立ちました。勿論最初は70%が輸入の部品でしたが、徐々に自分たちのモデルを作り上げ、輸入パーツは25%以下となり、アメリカやドイツ、そして日本の企業にも競争で引けをとらないまでに発展しました。

1995～97年には激しい競争に巻き込まれました。政府がWTOの規則に則り、輸入関税を40%から5%に引き下げたのです。「我々はグローバライゼーションを脅威とはとらず、チャンスと見做しました」とは氏の言葉です。彼は「今、国内マーケット向けに年間5000台を製造しているが、製造機械の生産能力を上げれば、世界市場向けに20,000台を作れる」と計算しました。

1996年日本では円高となり、日本の大型機器は、非常に値上がりしました。3日間にわたる粘り強い交渉の末、ヴァジラーニ氏はトランスエージア製品一台一台にローヤルティーを付ける代わりに、日本の企業が彼の会社に機器製造の技術を教えるという合意を得ました。これは双方の会社にとって利益をもたらすものでした。最初は冒険に始まった彼の夢は、完全に満たされることになったのです。

しかし実際、輸出を行うということは、汚職との戦いでした。

ある時、ドイツの会社との2000万マルク（約1023万ユーロ、約16億5千万円）の契約高を失う危険に

直面しました。インドの税関の官吏が輸入した重要部品を引き取るのに賄賂を要求したからです。その際賄賂は払わず、3ヶ月間その部品を倉庫に残したままにしました。税関のトップに会って、会社がこの契約を失えば、国が損失を被るのだと話しました。「彼らの自国へのプライドを呼び覚まそうとしたのです」。

契約の成約に間に合うように、その部品を引き渡してもらうことができました。2003年9月に「トランスパレンシー・インターナショナル」の"汚職と戦うための新しいビジネス原則"の紹介の席で、ヴァジラーニ氏は、基調講演を行いました。「汚職は進歩の大きな妨げです。そのために全てがおかしくなります。臆病さが間違った決定を導き出すのです。トランスエージア社は一つの模範を示せます。しかしもっと多くの会社が必要なのです」。

妻マーラの存在

彼は今、リーダー養成のための協会を創るビジョンを持っています。国事に携わりたいという100名程の若者が2年間にわたって学ぶコースを設けることです。訓練生には倫理的価値観を身につけてもらいます。アジア・プラトーにそのための施設を作りたいと、その基金として50万ドルを寄付しようとしています。ヴァジラーニ氏が行ってきた全てを、心から支えてきたのは、陽気な妻マーラさんでした。「私たちは両親の紹介で、自分たちも予期せぬかたちで結婚をしました。妻の提案で35の血液検査器をスラム街などに住む人々のための小さな診療所に低価格で提供しています。トランスエージア社は、現在年商3000万ドルを誇り、600人の従業員を擁しています。研究所には、50人の研究者や技術者、さらに生物医学の専門家が常駐しています。

企業を起こすということは、厳しい中でも為になる、素晴らしい体験でした。しかし、これは神の思し召しだと信じています。ですから、何が起きても心配することはありません。神が常に力を与えてくれますし、解決法も示してくれるのですから、いつも私が分岐点に差しかかると、誰かが私の手を引いてくれて、必ず正しい道へと導いてくれます」。

(Michael Smith, "Trust and Integrity in the Global Economy", Caux Books, Switzerland, 2007／マイケル・スミス著『グローバル経済における信頼と高潔さ』2007年より抄訳)

《インドICセンター開設40周年記念会議レポート》

# アジアプラトー(Asia Plateau)40周年記念大会に参加して

中山　啓介　(ハーモニー創造塾 代表／国際IC日本協会理事)

記念すべき3つの節目

アジアプラトー(Asia Plateau、略AP)は1968年1月20日、スイスのコー、アメリカのマキノ島、小田原アジアセンターに次いで世界で4番目に開設されたIC(旧MRA)の国際会議場・人材訓練センターである。インド西部のマハラシトラ州の盛都ムンバイ(ボンベイ)の南方約250キロ、デカン高原の一角にある。現在の建物から少し離れた高台から見る光景はまるでグランドキャニオンを髣髴とさせる大自然の絶景が拡がる。今でこそ多くの木々に囲まれ、ブーゲンベリアが美しい花を咲かせて、一種の桃源郷の趣を漂わせているが、候補地に選定された1964年の時点では、カシの大木が1本だけ聳え立つ荒地であった。それから歳月をかけてプランが練り上げられ、業者を選定し、人材と材料を確保し、困難な資金を調達し、最初のプランの竣工をみたのが4年後の1968年1月20日。まさに前人未踏の地を開拓した年からちょうど今年で40周年を迎えた。

また今年は、1908年MRA(現IC)運動の創始者フランク・ブックマン博士が30歳の時、北部イングランドのケズウィックで精神的なチェンジを体験されてから100年の記念の年に当たる。さらにまた、今年は1938年ブックマン博士の仕事が、第二次大戦勃発前のロンドンでMRAの名前で新たにスタートすると共に

スエーデンのヴィズビーで大きな転機となる会合が開かれてより70年の記念すべき年にも当たる。この節目の時に、アジアプラトーの40年の歩みを振り返り、将来への展望を新たにするために、この会議が開かれた。

### 40年の歴史・新たな役割

記念大会は、2008年1月15日（火）から21日（月）まで開かれた。大会テーマは、Re-investing in the future（将来に新たに投資する）。キーコンセプトは、3つのR、すなわちRe-connecting（新たに繋がる）、Re-engaging（新たに関わる）、Re-visioning together（新たに展望する）。全期間7日間を通して振り返ってみると、3つのRをうまく組み合わせた巧みなプログラムであった。

大会の始まる前日あたりから予定の参加者が到着し始めると、再会を喜び合う熱いシーンがあちこちで見られた。期間中、2才の坊やから88才の老齢の社会運動家までインド国内及び国外32カ国から約250名にのぼる参加者がこの記念大会に参加した。

初日15日（金）午後5時からの開会式には、映像による「APの40年の歩み」の紹介があり、1950年代インドにブックマン博士を招待するのに貢献したケクー・ガンジー氏など年配の人々を始め、60年代"March on Wheel（バスによるインド縦断マーチ）"という「クリーンでフェアーで融合したインド」を創るための一大民衆運動を指導しAP設立に与って力のあったラジモハン・ガンジー氏や"India, Arise!（インドよ、立ち上がれ!）"の関係者、80年代活躍した"Song of Asia（アジアの歌声）"の関係者、2000年以降青年育成のプログラムとして期待されている"Action for Life（生命活性化のための行動）"関係者ら多数の人々も参加し感動を共にした。さらにまた、20日（大会6日目）の記念式典には、地元マハラシュトラ州やパンチガーニ町の行政関係者や一般市民も出席し祝辞と共に、地域社会に対する貢献について謝辞を述べた。海外10カ国からのIC代表者から祝意のメッセージが述べられた。日本からは中山啓介理事と長野清志専務理事が参加した。

また、これまでAPでMRA(IC)の考え方・生き方をベースにした人間の内面開発セミナー"Effective Living and Leadership Training Program（ELL：効果的な生き方とリーダーシップ育成プログラム）"に参加したり、企画運営に当たってきた6分野（ビジネス・行政・軍隊・青年・教育者・農業従事者）の代表者からは、プログラムの意義と成果並びに今後の抱負が語られた。さらに、長年、裏方として支えてきたスタッフや従業員も全員壇上で紹介され、その労がねぎらわれ表彰された。

この日の午後は、インドに於ける最重要課題の一つである農村開発の新たな取組みとして、APの敷地内の一画に"Gram Pari, IC Rural Ecology Centre(ICエコロジーセンター)"がオープンした。これには、近隣の村々の女性や子供達が多数参加し、大会参加者共々新しい門出を祝った。

大会2日目から3日にわたり午前中前半は、9名のグループの中で毎朝3名ずつMRA（IC）を通じて自分はどのようなインパクトを受け、それをその後の人生においてどのように活用してきたか、またはそれを今後どのように生かしてゆく決意をしたか、について語った。

また、午前中後半のファミリーグループでの体験交流の場では、APのボランティアやインターン生なども混じって、人種・民族・年齢・性別の垣根を越えた交流が行われ、食事のセットアップや後片付け、ウォッシュアップなどの共通の作業体験と合せて人間同士の深い心の絆が生まれ、グループリーダーが核になってこのネットワークを共に育てていくことを誓い合った。

午後はAPの新たな役割について、同じく毎回3名、合計9名の人達が各々の熱い想いと各々が描くヴィジョンを語った。ICを通してインドが果たすべき役割、その可能性についてあらたなヴィジョンが提示された。

APの展望として、昨年秋インドと日本のICによるCIB共同開催及びこのAP40周年を契機として、従来のインドの国内ニーズのみならず、将来に向けてより広い世界的視野に立ち、アジア全体のニーズ、世界のニーズを考えて運営していく必要があり、インドのAPが、スイスのコーと肩を並べるくらいになることが強調された点は特筆すべきである。

### 具体的な動きとして

①セミナーの需要増に対応するため、先日新たにセミ

ナールーム（1室）の改修オープンがあり、大会5日目（19日）参加者に披露された。

②40周年記念募金（今後の建物施設・設備等の改装・更新・充実化）1口5万ルピー（日本円換算約15万円）が打ち出され、ロビーの壁面に掲示された。

③インドに於ける重要課題である農村開発の新たな取組みとして、APの敷地内の一画にICエコロジーセンターがオープンした。

④Rajmohan Gandhi氏が、同氏の新著"Mohandas"（高い評価を受けるガンジー翁の伝記）の本大会期間中の売上金の寄付を申し出られた。

⑤Disha（インドICの機関誌、"方向"の意味、AP40周年記念特集号）と小冊子"Frank Buchman's Legacy(フランク・ブックマンの遺産)"が発刊された。

日本とインドのパートナーシップ

インドと日本は今後ビジネス分野においても拡大発展するであろうとの観測も聞かれる中、そのパートナーシップは、今世紀人類が直面する課題解決に向けて重要な可能性を秘めていると思われる。

まず第一に、地球環境問題を克服するには、自然の中で生かされているとする生命観・自然観に基づく東洋的発想とアプローチが必須条件である。そこに科学技術が伴い、人間の新たなライフスタイルが伴わなければならない。

次に、宗教的価値観の相異より生ずる文明の衝突を克服するためには、排他的な一神教思想をも包含するインドや日本で培われた多神教的、宗教的寛容さを備えたものでなければならない。

他方で、地理的にはアフリカに近いインドと日本が協力し、将来中国を含めて協力すれば、アフリカに於ける飢餓や紛争・エイズなどの人道的な問題解決への道も拓けてくる。

最後に、インド人の価値観にある内面重視の思想は、物質的欲望を求める経済優先主義から精神的満足重視に向かう日本人や西欧人の価値観にも新たな栄養源となるものがある。先進国の病でもある精神的な不安を克服するには、永久に不変・普遍性を持つ宇宙の法則に根ざす人間観・宇宙観・幸福感が必要とされる。インドにはその伝統が強く、歴史上インドの精神的遺産を受け継いできた日本人は心性の深いところでインドの人と共通の土台を持っているように思える。

40周年を祝うための絵に見入る参加者たち

長年の労を感謝されたセンターのスタッフたち

## ◇◇◇ICニュース◇◇◇

### ■2008年日本IC国際会議「今、求められる真のリーダーシップとは」

第31回IC国際会議が6月6日(金)から8日(日)まで三浦のマホロバ・マインズで開かれます。本年のテーマ「今、求められる真のリーダーシップとは」の下、舩橋 晴雄氏（シリウス・インスティチュート代表取締役）やフィリピンのアリス・カデール氏による講演・ワークショップも行われます。また会議のために海外からのゲストも来日し、会議後には、アクション・フォー・ライフの修了生たちによる学校訪問等も予定しています。皆様ふるってご参加ください。

## ■4月・5月のICの行事のお知らせ

4月のIC懇親会は、4月6日（日）午後から、〈お花見とフルート演奏会〉を世田谷のICハウスで行います。また5月には世田谷ICハウスにて、6月の国際会議に海外から参加する青年の支援のための〈チャリティーバザー〉を5月6日（火）午後1-5時の予定で行います。いずれも皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参加ください。なお、これら行事のお知らせは、当協会ホームページに掲載しますので、併せてご覧ください。(http://www.initiativesofchange.jp/)

## ■第12回日本ミニHOHO in 唐津　開催

3月1・2日の2日間にわたり、第12回日本ミニHOHOが福岡の唐津で開催されました。
なお、第13回は11月15日（土）-16日（日）に箱根で開催する予定です。

## ■ICゲスト来日

去る2月25日から3月5日まで、アクション・フォー・ライフの発案者で台湾家庭EQ発展協会のリュウ・レンジョー夫妻が来日しました。リュウ氏は、3月1-2日に開催された第12回日本ミニHOHO（唐津）で講演し、またワークショップも行いました。
また、3月28日から4月4日の予定で、ヴェロニカ・クレイグさん（イギリス、IC専従）が来日します。

**《学生インターン・ボランティア制度について》**

国際IC協会では、インドICセンターやスイスでの国際会議でインターンやボランティアとして、ICの会議の運営をサポートする活動を行いながら、ICの精神や活動、語学などを学んでいく機会を提供しています。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

# 入会のご案内

IC（Initiatives of Change イニシアティブズ・オブ・チェンジ、前身はMoral Re-Armament(MRA)）は、1938年にロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分や自国から変わるべきである」という理念に基づき、あらゆる民族、宗教、文化の根底に流れる共通の倫理観（モラル）を普遍的な絶対基準（正直、純潔、無私、愛）にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。
当社団法人国際IC日本協会では、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等内外で様々な事業を行っています。また皆様からの会費及び寄付金により本協会は運営されています。一人でも多くの方々との相互交流を望むと同時に、集められた浄財により、内外の未来を担う青年たちの育成に寄与することを希求しております。何卒ご協力の程お願い申し上げます。ご入会された方には、各種会議やイベントのお知らせの他、機関紙等をお送りいたします。ご入会を心よりお待ちいたしております。

**編集後記**

今号は11月に開催した経済会議コー・イニシアティブズ・フォー・ビジネス（CIB）のレポートを中心に編集させて頂きました。会議は来年も開催される予定ですので、ご関心のある方はIC事務局までご連絡ください。尚、本機関誌に関してご意見等がございましたら、（社）国際IC日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。
編集企画委員：高橋久子、中嶋邦子、長野清志　編集担当：海老原真美